

(別添4)

【鹿児島県湧水町】

1人1台端末の利活用に係る計画

1. 1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿

令和3年1月に公表された中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』においては、全ての子供たちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現が強調されており、これらにおいて、1人1台端末の活用は重要な役割を担っている。

これまでも、GIGAスクール構想により整備された端末やICT環境の下、研修や授業研究を行い、効果的な利活用に向けて実践を図ってきたところであり、NEXT GIGAに向けて更なる活用を目指している。。

個別最適な学びの実現については、児童生徒の特性や学習進度に応じた教育方法を提供し、全ての子供たちが自分に最適な方法で学習を進められるよう探求していく。具体的にはAIドリルを活用し、児童生徒の学習の「つまずきポイント」が特定でき、これに応じ、AIドリルが適切な問題を出題してくれることで苦手な単元や分野等の底上げを図ることができる。また、児童生徒一人一人の操作ログや計算の過程、回答データの分析などが可能となっており、ダッシュボード機能により児童生徒の習熟度を確認し、よりきめ細やかな指導へと繋げることができるため、効率的・効果的な学習が実現する。

協働的な学びの実現については、現在も学習支援ツールの活用やグループでの調べ学習、ディスカッション等により多様な意見を尊重し合いながら学ぶ力を育んでいる。

今後は、リーディングDXスクール事業の先進事例等も参考にし、より良い授業改善を図っていく。

本町では児童生徒数は年々減少傾向であり、複式学級も今後増える見込みである。その中で県内でも他学校の複式学級同士をオンラインで繋ぎ、教職員側の視点では、A校の先生は上学年を指導し、B校の先生は下学年を指導するという新たな視点があり、児童側の視点では、多様な意見に触れ、他者の考え方を理解し協力して学ぶ事は、個々の学びが深まり「主体的・対話的で深い学び」にも繋がる例を参考にし、より良い授業改善を図っていく。

湧水町教育振興基本計画における「教育の情報化」をさらに加速させるためには、上記記述内容やクラウド環境等をより効果的に活用することが重要と捉えており、か

つ、非認知能力の測定、学習履歴(スタディログ)や健康データ(ライフログ)、及び全国的な学力調査や各学校の評価結果等を基にした、EBPM(Evidence Based Policy Making)によるデータ駆動型の教育改善を行っていきけるよう、今後調査研究を進め、「共に磨きあい、明日に輝く、心豊かでたくましい人づくり」に資するよう、時代の背景に応じた新たな学びの姿が実現できるよう目指している。

2. GIGA第1期の総括

令和2年度、町内小学校5校、中学校2校に1人1台端末を整備した。また、各学校の大容量通信ネットワーク及び電子黒板等周辺機器等も含めたICT環境の整備が完了した。また、令和4年度には教職員端末の更新を行い、ICT環境の充実が図られた。

これらICT環境の整備に加え、教職員の研修の充実を図り、ICT活用指導力の向上に努めてきた。令和5年度から本格的に端末持ち帰りを進めている。しかしながら課題もあり、児童生徒の端末の持ち帰りについては全学校で取り組んでいるが、インターネット環境のない家庭に合わせて持ち帰りが進んでいない学校があるため、学校で学びの充実の差が出ないように改善を図っていく。

3. 1人1台端末の利活用方策

人口減少・少子高齢化、グローバル化、デジタル化(Society5.0)等、変化の激しい不確実性の時代を生きる子供たちにとって、もはやICTの活用は必要不可欠なものとなっている。学校が、子供たちの可能性を広げ、これからの社会を生き抜く力を育む場所であるためにも、以下の視点からその具現化についてアプローチしていく。

1. 1人1台端末の積極的活用

GIGAスクール構想により整備したクラウド環境は基より、学習e-ポータル、MEXCBT、デジタル教科書、デジタル教材、生成AI等、様々なツールやソフトウェアの活用場面を創出していく。

例えば、2027年度から小学校6年生と中学校3年生の全教科でCBT方式に全面移行する全国学力・学習状況調査だが、全国的な取り組みとしてCBTが採用されており、普段の小テストや学習の振り返りについてもCBTが有効と考え、活用場面や問題作成・操作方法等、先進地の事例等参考にしながら推進する。

CBTにより迅速なフィードバックや学習履歴の分析が可能となり、教育の質の向上が期待される。また児童生徒が自分で調べ、考えをまとめ、そして発表・表現をする場面において、1人1台端末を積極的に活用することができるよう、全教職員へのICT研修や具体的な活用事例の情報共有等に努める。また、プログラミング教材を通して、課題解決に向けた論理的な思考力や問題解決能力の育成に努める。

今や、仕事でも家庭でも、社会のあらゆる場所でICTの活用が日常的となっている中、これからの時代を生きる子供たちにとって、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決し、自分の考えを形成するために必要な資質・能力は必須である。

今後、STEAM教育や生成AIにおけるプロンプトエンジニアリングなど、論理的思考力や想像力を高める教育について調査研究し、これには1人1台端末がツールとして必須であることから、あらゆる場面での活用を模索し推進していく。

2. 個別最適・協働的な学びの充実

「1人1台端末を始めとするICT環境によって実現を目指す学びの姿」においても記述した通り、1人1台端末を活用し、児童生徒が自分の特性や理解度・進捗に合わせて課題に取り組む場面をより一層推進し、授業においては、「指導の個別化」「学習の個性化」の定着を図り、個別最適な学びが独立した学びに陥らないよう、多様な他者と協働し、異なる視点を取り入れながら問題解決に取り組む姿を目指す。

デジタルとアナログのベストミックスを図り、自由進度学習や問題発見解決型学習(PBL)等、様々な学習方法について調査研究する。これにより、児童生徒自ら情報を収集し、分析する過程で自主性を育み、グループワークやディスカッションを通じて協調性やコミュニケーション能力の向上が期待される。

3. 学びの保障

本町では不登校児童生徒への支援として、多様な学び場「適応指導教室」を設置している。学校へ登校することが難しい不登校児童生徒の社会的自立に向けた状況の改善を図るため、学習や体験活動に取り組んでいる。

現在も、多様な学び場に通う児童生徒においても端末を活用しており、理解度・進捗に合わせた教育を行っていく。

また、「児童生徒の自殺予防に係る取組について(通知)」及び「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策(COCOLOプラン)」について、心や体調の変化を早期発見することの重要性が謳われており、本町では、鹿児

島県総合教育センターが作成した、学校適応感の変容を把握できる「学校楽しいと」を使用し、児童生徒の回答した結果を分析することで、不登校やいじめ、問題行動の未然防止等に取り組んでいる。しかしながら、アンケートの実施が年に数回と限定的であり、児童生徒の悩みや心の変化に早急に対応できない点もある。健康観察・教育相談を1人1台端末の標準アプリで活用し、児童生徒がいつでも悩みを相談できる環境を構築していく。

これにより、児童生徒のSOSを早期に発見し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携を図ることにより、適切な支援に繋げることが可能となる。

今後も児童生徒が安心して学校生活を送れるよう、1人1台端末を十分に活用するとともに、GIGAスクール構想において構築した環境を引き続き維持していく。